

はじめに

大阪における都心居住の代表的エリアとしてイメージが流通している上町台地界隈に、現実にはどのような居住の実情があるのか。全貌を把握することは容易ではないが、その一端だけでもつかむべく、前号(第七話)では、大阪ガス エネルギー・文化研究所の委託研究として、

幹線道路や主要駅を軸に、利便性優先で形成されていく新たなマンションと居住者の集積を、まちとの連続性という文脈の中でどう捉え直していくかという問題。次に、水平型の既存コミュニティが比較的温存されていると思われる地域で、新たに立地するマンションと既存コミュニティの関係性をどうつくりあげていくかという問題。激しい環境変化のダイナミズムを、まちとしてどう受け止め、再構築していくのか。上町台地界隈を持続的に発

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

大阪・上町台地発
都心居住文化の創造へ

(第8話)

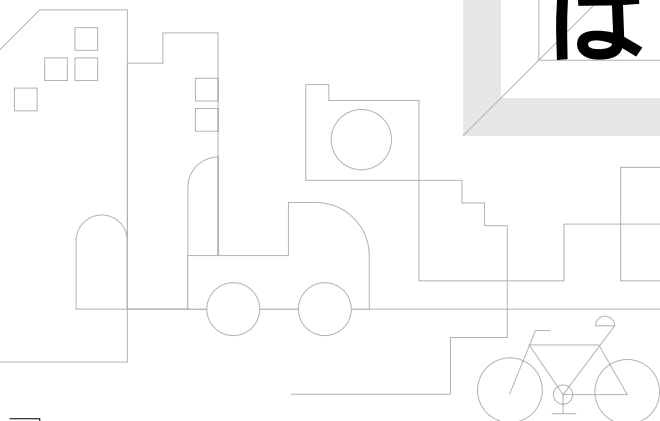
まちとの関係を取り結ぶ
現代の民俗地理的実践とは

京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻居住空間学講座高田研究室(以下高田研究室)が実施した調査結果の一部を紹介。GIS(地理情報システム)による居住特性の統計分析と、新設マンション居住者を対象としたアンケート調査を手がかりに、都心における地域コミュニケーションデザインの問題を探讨了。

前記の調査によって、筆者は次のような課題を改めて確認することができたのではないかと考えている。まず、

展可能な真の意味での都心居住の適地としていくことができるかどうか。まちづくりに関わるあらゆるステークホルダーの意識と行動が問われているといってもいいだろう。

その意識と行動に働きかけていく方策の一つとして、居住者の特性に応じた居住者と地域資源・地域活動をつなぐ仕掛けや仕組みの必要性を、同アンケート調査から垣間見ることができた。



都心の時空と居住者の位置から

前々号(第六話)でも触れたように、高田光雄氏(京都大学大学院教授・高田研究室)の言を借りれば、「都心居住とは“いえ”に住むのではなく、“地域資源の活用”や“地域内外の他者との交流”をとおして“まち”に住むことである」。すなわち「個人が、人・情報・風土などの蓄積すなわち“まち”の資源を有効に活用し、自らのライフストーリーを実現していくこと」であり、「個人は、“まち”に住み、集うさまざまな価値観を持つ他者と、地域資源を介在した交流を持つことで、新たな価値を発見する」というわけである。

ここでいわれている地域資源を介した他者との交流自体は、都心以外でも行われることであるが、資源の集積性・多様性と居住者の流動性の高さが都心の大きな特徴である。もっぱら経済の中心地として資源消費に猛進してきた都心に、生活・文化の論理を再確認・再導入することで、都市の持続的な発展、新たな価値の創造を可能にしていくこと。それこそが、都心居住のめざすべき方向性であり意義であるといっていだろう。そのような認識のもとに、有効な地域コミュニケーションデザインのあり方を検討していきたい。

そこで、まず大切なことは、流動性の激しい都心にあって、居住者がまちにおける自らの空間的・時間的位置を感じ取れることではないだろうか。空間的な関係性の把握を可能にするのは、いわゆる地図(マップ)の視点であり、時間的な関係性の把握を可能にするのが、歴史・物語性の視点である。そして、空間・時間両者を重ね合わせて捉えることを可能とするシステムが、例えばデータベースやアーカイブの視点といってもいいだろう。

経済性や利便性の圧倒的な力で変化する空間の中で、ともするとつかみ難い自らの位置やまちとの関係性だが、そこに長い時間の物差しを当ててみると、歴史の変遷の中に、その位置と物語性が立ち上がったくる。こうした作用を仕掛けとして、地域コミュニケーションデザインのの中に組み込んでいくことによって、都心居住のステークホルダーがまちに関わる際の意識と行動に変化を促すきっかけとすることができるとはいえないだろう。

集合的記憶の創造とコスモロジー

都心の時空の中に自らの位置を確認し、まちとの関わりの中で物語を紡ぎだす主体となっていくために欠かせない視点が、もう一つある。集合的記憶の存在と創造である。話は遡るが、本連載第二話にも登場している加藤政洋氏(現在・立命館大学文学部助教授)は、近世大坂の都心周縁部に配置された寺や墓地が、流動性の高い都市に生きる人々の記憶を集積する装置として重要な役割を果たしていたという。近世大坂において、人々はまるで都市の輪郭をなぞるがごとく、寺や墓地を巡り歩く信仰・レジャーが融合した生活文化を盛んに楽しんでいたというのである。「周縁や境界性を有する場を巡拝すること、それは都市の全体を、そして都市の秩序を認識するための民俗地理的な実践だったのである」(加藤)という。つまり、こうした文化的仕掛けによって、都市のコスモロジーが都市住民に共有され、近世大坂のまちのアイデンティティ、集合的記憶が形成されていたのではないかというのである。

近世から現代に目を転じれば、当然ながらとりわけ都心は、近世とは比べものにならないほどの激しい変化に



まちづくりにおける地図ワークショップの役割
—ウエマチMAPの取り組みから—

清水諒子

2005年度卒業

(大阪大学人間科学部人間科学科ボランティア人間科学講座4年)

はじめに

第1章 問題

- 1-1 研究の背景
- 1-2 研究対象となったフィールドの概要
 - 1-2-1 複合商業施設について
 - 1-2-2 まちづくり組織について
- 1-3 研究の目的・方法

第2章 フィールドワーク

- 2-1 フィールドワークの概要
- 2-2 エスノグラフィー
 - 2-2-1 ウエマチMAP準備期間
 - 2-2-2 ウエマチMAP実施期間
 - 2-2-3 関連イベントへの広がり
 - 2-2-4 子育てサークルへの広がり

第3章 考察

- 3-1 活動理論
- 3-2 活動理論による考察
 - 3-2-1 ウエマチMAP準備期間
 - 3-2-2 ウエマチMAP実施期間
 - 3-2-3 関連イベントへの広がり
 - 3-2-4 子育てサークルへの広がり
- 3-3 まとめ

第4章 実践的提言と展望

- 4-1 ウエマチMAPへの実践的提言
 - 4-1-1 人材の交流 - ステップ1 -
 - 4-1-2 意識変革の促進 - ステップ2 -
 - 4-1-3 協働事業の展開 - ステップ3 -
- 4-2 今後の展望

おわりに

図1 清水諒子氏(写真)と卒業論文目次

さらされている。その中で集合的記憶を形成する装置や仕掛けの必要性や価値は、切実に認識されないまま置き去りにされてきたといっても過言ではないだろう。加藤氏は、グローバル化が進行する現代の都市では、多様な文化的背景を尊重する寛容性を持った記憶の貯蔵装置が求められるとも指摘する。単一の価値観で集合的記憶を創造するのではなく、多様な価値観の出会いが紡ぎだす集合的記憶の創造こそ求められているというわけである。

近世大坂で共有されていたコスモロジーは失われて久しい。その後、際限ないまでに広がっていった大阪の市街地。しかし、新たな兆しもうかがえる。上町台地をフィールドに魅力ある住宅地づくりに取り組む数々のNPOの登場や、それらと協働で、住むまち大阪の文化を創造・発信していくこととする大阪市の「マイルドHOPESゾーン事業」など。いずれも空間特性・歴史特性両面を残す

上町台地を象徴的なストックとして、現代における大阪のコスモロジー、多様な価値観の出会いが紡ぎだす集合的記憶を創造していくこととする挑戦と見てもいいのかもしれない。

ウエマチMAPの取り組みから

さて、居住者とまちの関係を結び、地域コミュニケーションデザインの実践ともいうべき取り組みは、上町台地界隈でも既に数多見られる。さまざまな団体・個人による試行錯誤の軌跡があるが、そのうち、「上町台地からまちを考える会」に関連する二つの取り組みを紹介したい。

まず一つ目は、二〇〇五年に上町台地からまちを考える会の学生スタッフの一人、清水諒子氏(当時・大阪大学

人間科学部人間科学科ボランティア人間科学講座四年）が、協働の実践として取り組んだ地図ワークショップ「ウエマチMAP」である。清水氏は同取り組みへの参加をもとに、卒業論文を執筆している（図1）。ここでは、ウエマチMAPが居住者とまちの関係性という観点で、何を浮かび上がらせたかに着目し、同論文の中から関連するトピックを抜粋し紹介する。

そもそも同プロジェクトが目指していたのは、「上町台地からまちを考える会」の事務所が置かれている、小さな複合商業施設に対する地域住民の認知度向上であり、同施設のテナント会と「上町台地からまちを考える会」の協働事業として企画されたものであった。結果的に、施設の認知度向上の目的は達成できなかったのであるが、プロジェクトが進行していくプロセスの中で、多くの副産物が生まれた。マップをインターフェイスとする地域コミュニケーションデザインの可能性について数々の示唆を得ることができるのである。

ウエマチMAPの概要

ウエマチMAPの概要を清水氏の記述から紹介しよう。

「縦二一〇センチ横一四〇センチの大きさのパネルボードで作成した、Xを中心とする玉造界隈の地図を一階の共有スペースに常設し、来訪者にまちの情報を後述する方法で投稿してもらうというものである。まちの情報とは、ウエマチMAPでは、主に歴史・文化に関するもの、お勤めの風景、まちの宝などを想定している。地図の範囲は、子供たちからの投稿を想定し、周辺の小学校の校区を参考にXの周囲半径五〇〇メートルほどの地域が網羅されている。（中略）投稿する人は、葉書小の大きさのミニパネルに、マジックなどでまちの情報を書き、爪楊枝を使って地図に直接差し込む。このようにウエマチMAP

は、参加者を募集して、一緒にまちを歩き、地図に発見したことをまとめるといった形式のワークショップではないが、Xを訪れる人なら誰でも、いつでも、自由に情報を得たり書き込んだりすることができるという利点がある。また、投稿されるたびに情報が豊かになり、順次改訂されていくという点でも興味深い試みである」（清水）という形状、性格の取り組みである（文中のXは舞台となった複合商業施設を指している）。

ウエマチMAPへの投稿情報

二〇〇五年七月一七日から八月末まで、夏休み期間にXに設置されたウエマチMAPへの書き込み（投稿）は二二件。さらに同年一〇月一六日に難波宮跡の史跡公園で開催された中央区民祭りの会場にも出展された。新たに七七件の書き込みがあり、合計九九件の情報がウエマチMAPに集まったと報告されている（図2・3）。投稿された情報の特徴について清水氏の記述を借りて眺めてみよう。

「まちの情報」というと、大抵の来場者は、飲食店などのお店情報を思い浮かべることである。歴史や自然や風景など、あなたのとっておきのまちの情報を教えてくださいねと声をかけても、ほとんどの方からあのお店の名前なんやっただけなあとというような言葉が飛び出した。（中略）多くの住民の関心が、飲食店などのお店にあることが顕著に感じられた。最近、多数出版



図3 中央区民祭りで新たに77件の投稿情報が集まったウエマチMAP（2005年10月16日）



図2 複合商業施設Xに設置されたウエマチMAP
来訪者による投稿情報のミニパネルがちらほら
（2005年8月8日）



図4 わくわくまつりで展示された
「ちゅうおう子育てマップ」
(2005年11月25日)

されているまちの情報誌・雑誌・フリーペーパーなどによく見られるような、お店情報の載った地図に親しんでおり、まちの情報と聞くと、すぐにそれらを連想したのかもしれない。歴史や文化、風景などの地域資源に関心を持ってもらえるような仕掛けが不足していたことが反省された」(清水)

この現象は、単にマップづくりの仕掛け不足の問題にとどまらず、むしろ暮らしの舞台であるはずのまちが、個々のライフストーリーやライフスタイルにつながる心象地図や生活地図として捉えられにくい、ましてや集合的記憶も紡ぎだされない、すなわち現代の都心におけるコスモロジーの成立困難性を如実に物語っているといえるのかもしれない。

ウエマチMAPの連鎖反応

一方で、中央区民祭りでのデモンストレーションは、予想外の連鎖を生み出している。子育てに役立つ地図づくりを計画していた中央区で活動している子育てサーク

ルの一つが、ウエマチMAPに触発されて「ちゅうおう子育てマップ」をつくり、子育て支援イベント「わくわくまつり」に出展することとなったのである。自転車を持ち運び可能なやわらかい布製の地図に、色分けして情報を書き込んだ紙が貼り付けられたものである(図4)。

子育てという切実なニーズが、リアリティに富むミクロなまちの情報を掘り起こしている。「例えば、Xは子供連れの会合も貸し切り歓迎。古い車(ミゼット)があつて子供も大喜びと紹介されている。熱心に読む人、メモを取る人、携帯画像を撮る人、指を指しながら友人と話す人など、マップの前にはひっきりなしに人が訪れていた」(清水)。その後、製作者の一人から清水氏に寄せられた声も印象的である。「引きこもって子育てに悩んでいる人や、仲間探しをしている人の手助けができたかな。そのきっかけづくりができたかなーと思つてましたが。みなさんいい顔して帰ってくれたような気がします」とわくわくまつり全体への達成感が述べられていた」(清水)。

この思いがけない成果は、ウエマチMAP関係者大いに勇気づけてくれるものであった。と同時に、まちの資源は、利用者の切実なニーズや動機によつて多様に発見されるものであり、さまざまな心象地図や生活地図が存在し得るのだという、当然でありながら見過ごされがちな事実を証明してくれたともいえる。

関係者のつばやきから

上記の記述を含め、清水氏が論文中で紹介している関係者の語りは、都心に生きる人々の心を垣間見る貴重な証言でもある。例えば、ウエマチMAPを見ている人の中には新住民が多く、この界隈のことを知りたいというニーズがあるのではないかというつばやき。あるいは、地図上の間違つた位置に刺されたミニパネル(投稿情報)を

前に、「みんな間違いすぎやろー。でもそれがええんかもな」と、刺し直す関係者。

一連のプロセスの中で拾い集められた小さなつづきや行為を改めて眺めてみると、都心に生きる人々が日常生活の中で、まちと関係を取り結ぶことの困難さ、点としての情報は無限に手に入っても、自らのライフストーリーやアクティビティと、他者のライフストーリーやアクティビティを重ね合わせて、集合的記憶、まちのコスモロジーを形成していくことの難しさが実感できる。そして、だからこそ、まちと暮らしの関係不全を乗り越えていこうとする小さな兆し、心の動きを見出すこともできる。

ウエマチMAPをとおした清水氏の心と行動の軌跡は、実践的提言で結ばれている。その提言の中には、例えば、「ちゅうおつ子育てマップ」から母親たちのまちに対するニーズを汲み取り、まちづくり活動につないでいくことができるのではないかという思いや、まち歩きワークショップの提案が盛り込まれている。お店情報だけにとどまらない、人々のまちに対する新たな関心やニーズを掘り起こし、そこで発見された情報をウエマチMAPに反映し、さらにまちにフィードバックしていくという循環を促すアイデアである。

ワークショップによる物語性の付与

清水氏の提言に登場するまち歩きワークショップには、お手本としての具体的な取り組みが存在している。二〇〇五年九月～十一月にかけて應典院寺町倶楽部主催、上町台地からまちを考える会共催で実施された「上町台地アート・ツーリズム二〇〇五 アートなまちの探検隊」で

ある。

同ワークショップは、上町台地からまちを考える会の山口洋典氏をプロデューサーに、應典院の田中いずみ氏(当時)をディレクターとして、三日間に渡るプログラムが組み立てられ、参加者によって肉付けされていったものである。その趣旨や効果について、山口氏の報告(1)等の一部を抜粋紹介したい。

アートなまちの探検隊の概要

「アートなまちの探検隊」の趣旨は、同ワークショップのチラシに次のように記されている(図5)。

「上町台地は歴史資源にあふれたまちです。と同時に、住みこたえのある都心居住のモデルとしても取り上げられ、多くの人、もの、できごとがあります。戦後六〇年という節目を迎えた二〇〇五年、そんな上町台地を知り、上町台地で歴史を見つめ、上町台地から学ぶ、ちよっとおしゃやかな仕掛けに取り組みます。モダンなお寺 應典院 を拠点にまちを調べ、調べた結果を携えてまちを巡り、巡った中から得た気づきを、他者の言葉によってさらなる意味づけを行う、アートなツーリズムです」

そして、三回連続のプログラムは、それぞれ「しらべる編」「つなぐ編」「たしかめる編」と名づけられ、自転車を



図5 「上町台地アート・ツーリズム2005 アートなまちの探検隊」のチラシ

足に「しらべる編」は寺町界隈、空堀・コリアタウン界隈、大阪城界隈の三つの組に分かれて、インスタントカメラを手に、食欲に おもしろい 地点を収集することに。つなぐ編は、前回収集された地点情報を捕捉するために、出発前にそれぞれの地点情報を地図で確認した上で、どのような順番で廻るのが効率的で効果的かを考えてまちに出了た。たしかめる編は第一回でも招いた案内人のゲスト、小田切聡氏(西代官山クラブ代表)を「ご意見番」に、前の二回で収集された情報と、上町台地の探検経路を机上で整理した「山口」といったスタイルで進められている。

上町台地の時空につながる仕掛け

山口氏は、同ワークショップの特徴を一言で、「物語作成型ワークショップ」と表現している。すなわち、まちとの関係性を取り結ぶ方法論として、マップを介した空間把握のプロセスの中に記憶や時間軸を想起させる仕掛けを確信的に組み込み、物語性の付与をもくろんでいるのである。

山口氏の記述から、その評価と着眼点を紹介しよう。

「このワークショップで特筆すべきことは三つある。まず、デジタルカメラや携帯電話のカメラ機能が、すっかり人々の手中に収まっている今、あえてインスタントカメラ、つまりボラロイドカメラ式を用いることにより、限られた枚数を有効に考えながらまちを探検することである。次に、まちを巡るにあたって、詳細な地図から手書きで写真(トレース)した実に不親切な地図に参加者が情報を書き加え、それぞれの組ならではのものに仕上げつつまちを探索して、結果として巡った軌跡が地域観光の一見本になるということである。(中略)

このワークショップを「物語型」といえるのは、あらかじめ手渡された不親切な地図が日常生活の記憶を思い起こさせ、空間と時間の両面から「まちの物語」を探ることができたためだ。自転車車で探索することをおして、普段何気なく触れているまちの歴史に関心を抱き、そしてまちの風景の中に見つけ出した歴史の痕跡をインスタントカメラによって切り取る。その際、そうして辿った軌跡がまちを巡る「モデルコース」となる」(山口)

都心に暮らす人々が、自らの空間的・時間的位置を身体性と物語性をももたせて実感し、まちとの関係を取り結ぶ、手法としての可能性がうかがえる(図6)。そして山口氏は、物語作成型ワークショップの発展の方向性にも思いを馳せている。

「こうして、ワークショップの成果が聖火リレーのように次なるワークショップにつながっていくこと、さらにそのリレーで走った人々がその体験を通じて得た感動を、走っていない第三者に伝えていくこと。これが物語型ワークショップの実践的意義である。(中略) まちの物語を探り、自らが物語を編集し、さらに物語を編集するという大きな物語を生み出していくこと、このような取り組みが結果として「詠み人知らずのまちの物語を紡ぎ出す機会を生み出すであろう」(山口) かつて近世大坂では、「三十三観音巡」や「七墓巡」といった文化的仕掛けによって、都市のコスモロジーが都市住民に共有され、近世大坂のまちのアイデンティティ、

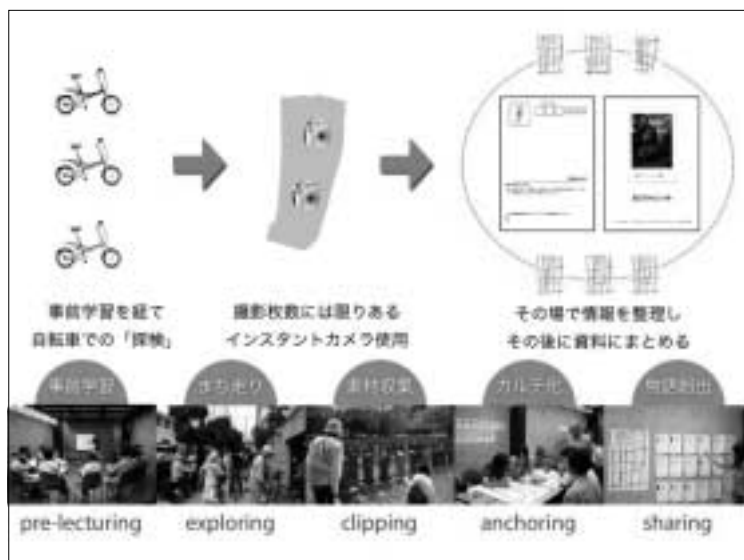


図6 「アートなまちの探検隊」における物語性の創出
(山口洋典氏による図解)

集合的記憶が形成されていた。それを思えば、グローバル化が進む現代社会にあって、物語型ワークシヨップとは、現代における都市のコスモロジーを生み出す仕掛け、多様な価値観の出会いが紡ぎだす集合的記憶を創造するための、新たな民俗地理的实践といえるかもしれない。

第八話の終わりに

二〇〇六年六月四日、上町台地からまちを考える会の発足三周年フォーラムが上町台地上の高津宮を会場に開催された。「地域資源と市民力を考える」をテーマに、徳島県上勝町と静岡県浜松市から駆けつけてくださったゲストお二人のプレゼンテーションは、奇しくも、ともに現代社会の課題に地域から向き合う民俗地理的实践とも



図7 「ヤッポー調査地図 正木ダム湖周辺」(徳島県上勝町)

いうべき知恵を内包し、その意義を強く印象づけるものであった。

例えば、澤田俊明氏(有限会社環境とまちづくり主席研究員)は、上勝町で取り組まれている「ヤッポー調査」(ヤマビコを見つけた人の名前が地図に残る自然体験プログラム)の目的について、地域の持続可能性の実現のために、地域に生きるすべての人にとつてのそれぞれの記憶や体験と直結した地理情報の共有が、いかに大切なことであるか、「ヤッポー調査」はその認識に端を発した取り組みであることを強調した(図7)。

また、山口祐子氏(特定非営利活動法人浜松NPOネットワークセンター代表理事)は、大きな「地球ボール」の上に、一人称の物語を個々につないで情報を集めて公共の物語へと転じていくアイデアなど、グローバル化する地域社会の課題を克服していく方法論を印象深く語った。一人称としての当事者の尊重を起点に、地球大の物差しを当てながら、公共の問題へと視点を相対化していくプロセスは、実に鮮やかである。

この日、上町台地で確認された空間的視座と時間的視座、あるいは社会的多様性と歴史的多様性、二つの対象と物差しによる一人称の物語の公共化の視点。それは、上町台地からまちを考える会と関係団体の協働による、ウエマチMAPや物語型ワークシヨップの発展的取り組み、それらとリンクした地域資源データベースの再構築など、今後多層的、重層的に展開されていくであろう地域コミュニケーションデザインの実践に、大きな力を与えてくれる何よりの贈り物であった。

(大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員)

CEL

(1) 大阪ガスエネルギー・文化研究所委託による「都心集合住宅を活用した地域コミュニケーションデザインに関する調査研究」報告書(財団法人大学コンソーシアム京都/二〇〇六年三月)から。